

誰かに教えたくなる 科学技術の話 67

人間が絶滅させた 「世界の動物」



東京大学名誉教授 月尾 嘉男

四十六億年前に誕生した地球は生物が充満した奇跡の惑星とされるが、過去には七〇%から九〇%の生物が絶滅した時期が五回存在している。原因は火山の爆発、隕石の衝突、気温の低下など自然現象であるが、現在、第六の大量絶滅が発生しつつある。これは自然現象ではなく人間活動が原因である。今回は人間が絶滅させた六種の動物を紹介し、自然と人間の関係を再考する。

オーロックス（一六二七絶滅）

古代ローマがヨーロッパ全域に版図を拡大していった時代の森林地帯にはバイソンやヘラジカなどとともに現在の家畜のウシの祖先になるオーロックスも棲息していた（図1）。二〇〇万年前にインド一帯に登場し、アジアからアフリカに活動地域を拡大、二五万年前にはヨーロッパに到達した。一万五〇〇〇年前の遺跡とされるフランス南部のラスコー洞窟の壁画にも描写されている。

中世のドイツの詩歌『ニーベルンゲンの歌』には王子ジークフリートがバイソン、ヘラジカとともに四頭のオーロックスを殺戮する場面が叙述されており、それに影響された人々が真似をして狩猟の

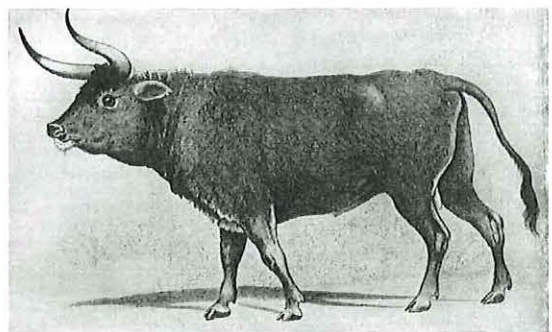


図1 オーロックス

対象にしたため、次第に頭数が減少していき、十六世紀には貴族の領地にしか棲息していない状態になった。しかし、立派な角と美味な肉のために狩猟が減少することはなく頭数は激減していった。

そこでポーランドの首都ワルシャワ近郊に保護区域が設定されたが、それでも密猟により頭数は減少、一五六五年には三〇頭、一六〇二年には四頭、一六二〇年には最後の頭のみになり、その一頭が一六二七年に死亡して絶滅した。一九二〇年代になってドイツで外見がオーロ

ツクスのようなウシを母体として再生され、その子孫が現在も飼育されているが本物ではない。

ドードー（一六八一絶滅）

アフリカ大陸東岸の約五〇〇キロメートル沖合にあるマダガスカル島から、さらに六〇〇キロメートルほど東側のインド洋に十六世紀初頭にポルトガルの船乗りが発見するまでは無人であったマスカリン諸島が存在する。一五九八年、その一島のモーリシヤス島にオランダの艦隊が上陸したとき、地上を歩行するだけの奇妙な鳥を発見し、二羽を捕獲してヨーロッパに持ち帰った（図2）。

ポルトガルの言葉で「ウスノロ」を意味する「ドウド」からドードーと名付けられた珍鳥はヨーロッパで評判になったが、棲息する島では危機に直面することになる。モーリシヤス島は東洋への航海の絶好の中継基地となつて入植する人々が到来し、飛翔できず地上に営巣するドードーは人間とともに到来したイヌやネズミの格好の獲物となり、急速に減少していった。

生存しているドードーが最後に目撃されたのは一六八一年であり、十二年後に

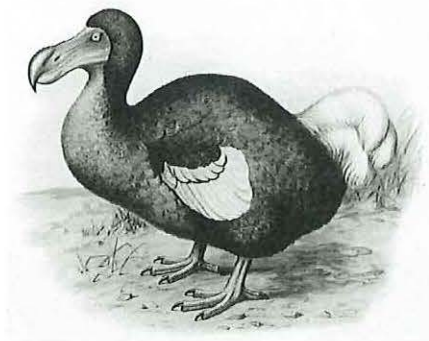


図2 ドードー

探索されたときには一羽も発見されなかった。それ以前にヨーロッパに移送されたドードーも繁殖することはなく、唯一の剥製も一七五五年に焼却されてしまった。一八六五年にイギリスの作家J・キヤロルが刊行した児童小説『不思議の国のアリス』がドードーの存在を後世に伝承する数少ない記録になっている。

ステラーカイギュウ（一七六八絶滅）

一六八二年にロシアのツァーリとなつたピョートル一世は広大な国土の東方の探検を開始し、一七二四年にV・ペーリ

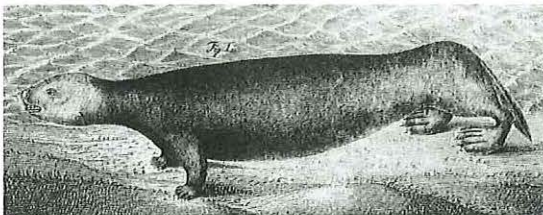


図3 ステラーカイギュウ

ングを隊長とする一隊を派遣した。ピョートル一世は翌年死亡するが、一隊は一七三〇年に帰還した。さらに一七四〇年に再度の探検が企画され、ペーリングは六十歳になっていたが隊長となり、同行したのが医師で博物学者のG・ステラーであった。

一七四一年に「サンクト・ピョートル」を旗艦とする二隻の帆船はカムチャツカ半島のペトロパブロフスクを出航、アメリカ大陸を目指して東方に航海し、ラスカに到着した。しかし高齢のペーリ

ングは大陸を探検せず帰還することにし、アリユーシャン列島を探査しながらカムチャツカ半島の二〇〇キロメートル手前の無人のコマンドルスキー諸島に到着したが、ここでベーリングは死亡した。

この無人の孤島での越冬期間にステラーは様々な海洋生物を発見するが、最大の発見は体長八メートル、体重一〇トンはある海洋哺乳動物で**ステラーカイギュウ**と名付けられた(図3)。この発見が報告されると多数の猟師が殺到し、一七六八年にステラーの友人が現地を調査したときには三頭が生息していただけで、それらをすべて殺戮したため絶滅した。発見から二十七年後のことである。

ジャイアントモア (一七七〇絶滅)

ニュージーランドには別名アオテアロアという国名がある。無人の孤島に十世紀後半にマオリというポリネシア系人が大型カヌーで到来するが、洋上の浮雲を遠望して陸地があると判断して自分たちの言葉で「長く白い雲(アオテアロア)」と名付けたのが由来である。しかもオーストラリアに哺乳動物が発生する以前に分離された孤島のため、哺乳動物は洋上を飛来したコウモリのみであった。

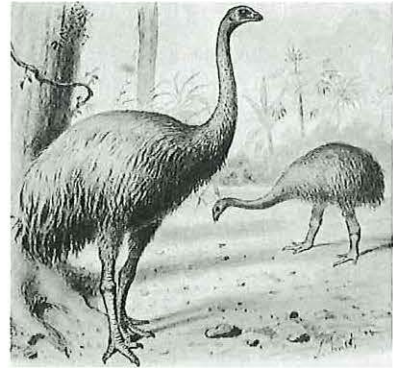


図4 ジャイアントモア

到来したマオリが出会ったのが飛べない巨鳥**ジャイアントモア**で、身長三メートル以上、体重二五〇キログラムはある巨大なダチョウのような生物であった(図4)。マオリはタレボと名付けていたがモアという名前が定着した。由来は骨を収集に来島した人々が「もつと骨を(モア・ボーンズ)」と要求したからとか、モアが生息していた時代の小鳥の鳴声が「モア」であったからなど諸説がある。

前述のドードーと同様、天敵の存在しない環境ではエネルギーを消費する飛翔は不要であったが、人間という天敵が登場すれば環境は地獄に変貌し、一七七〇

年代には絶滅したとされる。しかし、ニュージーランド南島にはマオリの人々も侵入していない森林地帯があり、そこには生息しているという意見や、三〇〇〇キロメートル北東の太平洋上のクック諸島には生息しているという見解もある。

クアツガ (一八八三絶滅)

一六五二年にアフリカ大陸の南端にオランダが植民都市ケープタウンを建設した。そこからアフリカ大陸の内部に進出していくが、一帯の草原はシマウマ、ガゼル、ヌーなど草食動物の宝庫で、その一種が**クアツガ**である。頭から首まではシマウマのような模様があるが、胴体にはほとんど模様がなく、現地に生活するホッテントットの呼名がクアカーであったためクアツガとなった。

あまり人間を警戒しない性格であったために次々と殺戮され、肉は食料、皮は革袋や革靴に利用された。当時の資料によると、ケープタウンから奥地への道路の周辺には射殺され骨だけになったクアツガの死体が散乱していたと記録されている。一八〇〇年頃にはケープタウンの郊外にも出没していたが、一八六一年には最後の野生の一頭が射殺されて絶滅し

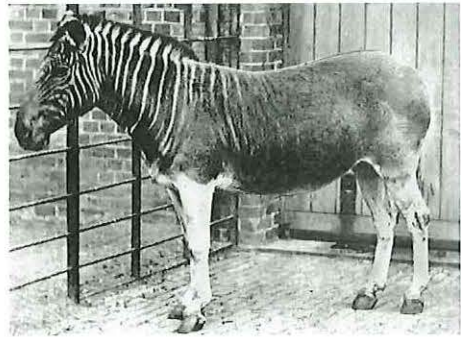


図5 クアッガ

たと記録されている。

十九世紀中頃にはヨーロッパに送付され、ロンドン動物園に三頭、ベルリン動物園に一頭、アントワープ動物園に一頭、アムステルダム動物園に一頭が飼育されていた(図5)。しかし、この一頭が一八八三年に絶命して地球から消滅した。クアッガはサバンナシマウマの亜種であるため、一九八六年から復活計画が推進され、クアッガのようなサバンナシマウマは増加しているが本物ではない。

リヨコウバト(一九一四絶滅)

十七世紀になって北米大陸に到来した

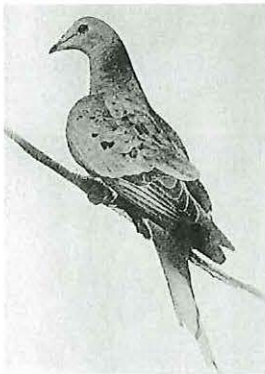


図6 リヨコウバト(マーサ)

移民が春先になると目撃したのは日中でも薄暗くなるほど上空を大量に移動していくリヨコウバトと名付けられた渡鳥であった。この全長四〇センチメートルほどのハトは夏季には北米大陸の中部に営巣し、初秋になると巨大な集団となって時速一〇〇キロメートルにもなる速度でメキシコ湾岸に南下するが、全体で数十億羽と推定される規模であった。

残念なことに、このハトは美味であるうえ羽毛が羽根布団の素材に最適ということから注目され、その時期に開通した大陸横断鉄道を利用して、捕獲した中部から人口が集中している東部へ大量に輸

送することが可能になり捕獲に拍車がかかった。当時の記録では、ある貨物列車が二十三万羽、重量五〇トンのリヨコウバトを中部の産地から東部の大消費地へ輸送したとされている。

リヨコウバトは一年に一回、一個しか産卵しないため頭数が回復することは困難で、一八九〇年代には見掛けることはほとんどなくなった。一九〇六年に狙撃された一羽を最後に野生では消滅し、一九一〇年にはシンシナティ動物園で飼育されていた「マーサ」(ワシントン大統領夫人の名前)(図6)だけになり、その一羽が一九一四年に死亡して地上から消滅した。

今回は六種の有名な絶滅動物を紹介したが、これはほんの一例ではない。現在では一日に百種、一年に約四万種の生物が消滅していると推定されている。この傾向が継続すれば二十五年後には地球の生物の四分の一の種が消滅することになる。それらの生物が構成する生命圏域に人間は生活しており、それが縮小していくことは人間が生存している足元が崩壊していくことを意味する。